



発行責任者
西川 晃 二

【校長室より】

対馬紀行

平成26年度が始まりました。年度末に18名(定時を入れると22名)の教職員と別れ、新年度は全日制17名、定時制4名、計21名の先生方を迎え、スタートしました。別れの後には、出会いがあります。生徒も同じで、176名の卒業生の門出を見送り、184名の新入生を迎えたところです。3学年合わせて539名の五高丸が出航しました。

本校の教職員の年齢構成については、ご承知のように若い先生方が多く、それ故に、生徒と真っ正面から向き合って熱心に指導する先生方ばかりです。年配の先生方のように老練な生徒指導の技はありませんが、若い情熱で日々真剣に職務に励む教職員に対しては、身内ながら感謝の念を抱いておるところです。送り出した先生方の多くは30代後半から40代の先生方です。彼らとて本校へ赴任したのは20代、30代でしたが6年の離島勤務を終え、教員としても円熟味を帯びだした頃には転勤となるのです。ちなみに、今年新たに赴任された先生方の平均年齢は31歳ほどです。新任の先生方も先輩教員の姿を見て成長してくれるものと期待しています。保護者の皆様方の温かいご支援を賜りましたらと祈念するところです。

さて、先日、新採の頃の教え子の結婚式が対馬でありました。久しぶりの対馬行でした。20代から30代前半の教員生活を過ごしたのが対馬です。五高の先生方がそうであるように私自身も「真剣」勝負で生徒に接してきたように思います。ただ、だからといって満足すべき指導ができたとは決して思いません。むしろ反省と悔恨の思いが強くなります。当時の自分の指導の未熟さを反省するたびに思い出すのが、T君の人なつっこい顔です。T君は1年次、私のクラスの生徒でした。彼は、無邪気さと、頭の良さと、だらしなさが混雑した生徒でした。小学校、中学校を小規模校で過ごし、先輩には「〇〇兄ちゃん」と呼び、教員には愛称で接するような生活を過ごしてきた子でした。高校に進学して近隣の中学校から進学してきた生徒の多さに、そして、大人社会への入り口での生活は彼にとって正直とまどうことが多かったでしょう。そのような対馬の現状であるからこそこの思いで、高校では社会の入り口としての教育を施さねばと思う教員集団でした。だとすれば彼は高校の教員を前にして今までの生活との違いに違和感を抱いたはずで、そのことに気づかぬ私は、一方的に彼に大いに期待しました。だらしなさはあるものの、磨けば必ず輝くはずだとの強い思いから学習から生活面に至るまで厳しく接してきたのです。ところが、彼は学校からの連絡は親に渡さず、日々の課題は出さず、自分の私物を教室中至る所に放置するは、試験の時には居眠りはするは、さらには「人のものは自分のもの」という感覚、ほとんど「親(教員)の心、子知らず」という体でした。しかし、このままではいかぬとの思いに、私は彼に対してより一層厳しく接してきました。定例の家庭訪問(昭和の時代は全生徒の家庭訪問をしていたものです。いつ頃からかそれはなくなりましたが。教員の負担加重?保護者への配慮?それはわかりませんが、私はできれば復活したいとは思っています。)の際に母親から「何で先生はうちの子に厳しいのですか」との訴えにも意に介せぬ自分でした。その時は「彼に対して期待しているからそうするのです」とでも言ったように記憶します。しかし、1年次のT君の素直さ、無邪気さは学年が進むにつれ消えていき、教員に対しては反抗的な態度をとる生徒になっていきました。そして、卒業していったのです。

今にして思えばT君は少々発達障害の傾向があったのではないかと考えています。そのことに気づかず適切に接してあげなかった自分を今でも責めるのです。親というものは、自分を育ててくれた「親」のごとく我が子に接するように、教員は自分を教えた「教員」のごとく生徒に接しがちです。経験則に従ってしか生きることができないのが人の限界かもしれません。だとしても、その限界を超えねば人としての成長はありません。それを可能にするのは学びでしかないのです。学問、読書であるかもしれません。また先人、先輩に学ぶことには出来ないと思うのです。

結婚式に戻ります。高校卒業後4半世紀の時が過ぎているにもかかわらず、再会した教え子の顔はかつての顔と変わりありませんでした。さらには、どこに住み、その保護者の人となりまで思い出したものです。そして、それぞれの教え子の高校時代のエピソードなどなど。

若い故に「真剣」勝負で接してきたからなのでしょうか。

追伸：新婦さんですが、市長自ら採用した「島おこし隊員」で、青森出身の博士号を有する才色兼備のお嬢さんでした。そして、教え子の新郎は30過ぎてから帰郷し、漁師になって対馬の島おこしに奔走しています。

入学式 8日(月)

春の日差しが降り注ぐ中、本校体育館にて入学式が行われました。国歌斉唱の後、新入生184名が西川校長から入学を許可されました。校長式辞においては、新入生に対して入学における心構えとして3つのことをお話していただきました。「時間は公平に与えられているということ」「理想を描き磨くのは自分自身であること」「恩に報いるということ」、この3つをしっかりと胸に刻み、豊かな未来を切り拓くために、自ら学び、考え、行動できる逞しい人間になってほしいとの言葉をいただきました。これまでの自分を振り返り、よりよき自分になる。新たな「自分の創造」のために夢を描き、目標に向かって自分を磨こうということを強調し、新入生を後押ししていただきました。入学したときの気持ちを忘れることなく、常に未来に向かって輝く五島高校生になってほしいです。新入生代表宣誓では1組の村井雅信君が「学業に専念し、五島高校の伝統の継承と新たな歴史の創造に邁進します」と宣誓を行い、新入生による初々しくも力強い校歌が体育館に響き渡りました。



入寮式 8日(月)

4月8日(火)、本校メモリアルホールにおいて、入寮式が行われました。今年度は男子5名、女子7名、計12名が入寮しました。式では校長先生から激励のお言葉をいただいた後、入寮生を代表して1年6組の白濱生成君が誓いのことばを宣誓してくれました。慣れない環境の中で集団生活をするに對しての不安な気持ちもあるかもしれませんが、しかし、寮生活で得ることができる絆は、かけがえのないものです。先生方や先輩方の指導を受け、1日でも早く寮生活に慣れ、五島高校での生活を充実したものにしてくれることを、職員一同期待しています。

対面式 9日(火)

4月9日(火)に対面式が行われました。まず生徒会長の岩永莉奈さんが「目標を持った高校生活を送りましょう」と歓迎の挨拶を行いました。続いて、1年7組の山中侑希帆さんが新入生を代表して「不安も多いですが、先生方、先輩方、ご指導をよろしくお願ひします」と挨拶をしました。

また、生徒会による生徒会行事と役員紹介や新転任の先生方の個性溢れる自己紹介も行われ、生徒たちの顔にも笑顔が見られました。2、3年生による「蒼き故郷」の歓迎合唱も行われ、新たな出会いへの喜びを大きな声で表現していました。

新入生や新転任の先生方を迎え、五島高校の26年度がスタートしました。今までの伝統を引き継ぎながらも、一人一人が個性や力を発揮し、更に飛躍できるような五高生活を送りましょう。

新入生宿泊研修 16日(水)～18日(金)

4月16日(水)～18日(金)の3日間、国立諫早少年自然の家において1学年の宿泊研修が行われました。この3日間で「真の五高生になる」ことを目標に、様々な活動を行いました。集団行動、校歌遠征歌の練習を通して団結することの大切さを学び、全力で取り組むことができました。五家原岳登山では困難に協力して立ち向かい、一歩一歩進んでいくことの大切さを学びました。山頂では、クラスごとに励まし合いながら登った生徒たちをすばらしい景色が出迎え、達成感を持った晴々とした笑顔が見られました。夜には自学の時間があり、静まりかえった集団の中で、黙々と学習に励みました。この経験も今後の学習に大いに役に立つと思います。また、卒業した先輩4名による講話では、「学習について」「部活動との両立について」などそれぞれがわかりやすく話をしてくれました。最後はクラス対抗の「集団行動コンテスト」「校歌・遠征歌コンクール」行われ、それぞれのクラスでまとまりが生まれたように感じます。

この研修の目的は、学年やクラスの融和を深め、五島高校生としての誇りや自覚を身に付けることでした。様々な活動を通して、集団における規律の大切さやクラス毎に協力してひとつのものを作り上げることの素晴らしさを学ぶことができました。この研修だけで満足することなくさらに成長してほしいと願ひ、この3日間を高校生活の原点として今後の生活に生かしてほしいと思います。



集団行動コンテスト

優勝	2組
2位	5組
3位	6組

校歌・遠征歌コンクール

優勝	1組
2位	6組
3位	7組

普通科66回生・衛生看護科39回生 結果総括

国公立大学合格者数80名（昨年度85名）
 国公立大学合格率55.6%（昨年度51.2%）
 難関大合格者数4名

（名古屋大学2名、大阪大学1名、九州大学1名）

長崎大学合格者数13名

私立大学合格者数80名

（早稲田大学、中央大学、東京理科大学、同志社大学、立命館大学等を含む）

公務員合格者（自衛隊除く）1名（五島市役所）

主な就職先：

日本郵政・五島漁業協同組合・ごとう農業協同組合

衛生看護科：准看護師資格試験全員合格（20名）

※合格者数は現役生のみへの延べ人数

2年連続の東大合格はなりませんでした。難関大にも合格者を出すことができました。その他、大逆転で合格を勝ち取った生徒も、目標とする大学に一步及ばなかった生徒もいましたが、それぞれに最後の最後まで必死に学習し続けた姿が印象的でした。

素直な生徒が多く、学年運営においては私たち教員が助けられることが多くあった学年でした。これからそれぞれの道を歩み始めてからも、集団の和を大事にしなが、最後まで諦めず目標に向かう人間であってほしいと願っています。

新転任の先生方

教員	西澤 秀行	美術	佐世保北中学校より
教員	淵上 透	英語	諫早高校より
教員	森 康一朗	国語	西彼杵高校より
教員	塚副 祐貴子	国語	佐世保工業高校より
教員	檜本 英人	数学	諫早高校より
教員	島崎 英範	英語	大村高校より
教員	金子 真名美	音楽	新規採用
教員	平野 朝子	看護	新規採用
教員	長尾 正博	保体	五島海陽高校より
教員	平山 豪	保体	上五島高校より
教員	村上 勇磨	保体	福田小学校より
教員	川田 理絵	家庭	北松農業高校より
教員	野口 武靖	物理	西陵高校より
教員	平山 紫帆	国語	新規採用
教員	中山 未菜	英語	新規採用
主任主事	藤林 美由紀	事務	島原特別支援学校より
実習助手	小柳 正樹	事務	新規採用

分掌・学年主任の先生方

教務部	増本 欣也	衛生看護科	西村 章子
生徒指導部	引地 勝	ｽｰﾍﾞｰｽ	橋口 史子
進路指導部	阿比留 憲一	寄宿舎	北川 昭彦
生徒会指導部	本田 洋久	第1学年	淵上 透
教育相談部	茶園 孝一	第2学年	久保田 幸成
保健美化部	中村 孝士	第3学年	宗田 将平
研修図書部	永山 一朗		

PTA総会のご案内 5月24日（土）

PTA総会・学級懇談会を5月24日（土）に開催します。
 多数の保護者の皆様の御参加をお待ちしています。

各学年より

「基礎・基本の大切さ」

1学年主任 淵上 透

第1学年のみなさん、五島高校への入学おめでとう！心から歓迎いたします。これから3年間の高校生活で君たちが大きく成長してくれることを期待しています。

4月8日に入学して以来、新入生週間や宿泊研修を通じて、「元気で気持ちのいい挨拶」「5分前行動」「他者への配慮」「自ら進んで行動する」という日常生活における基礎・基本を君たちは一貫して行ってきました。最初の頃は言われたことをこなすのが精一杯でした。頭では理解しているつもりでもなかなか行動に移せず苦勞している人たちもたくさんいました。校歌・遠征歌も「歌詞を覚える」「大きな声を出す」という単純なことが徹底できず何度も繰り返し指導を受けました。

そのような状態で迎えた宿泊研修。初日は他の高校の生徒の姿に大きな刺激を受けましたね。その後から君たちの振る舞いに少しずつ変化が表れました。言われたことをただやるのではなく、集団生活や集団行動や校歌・遠征歌がどうしたらさらにいいものになるのかを考え、工夫するようになりました。最終日のコンテストやコンクールに向けて、君たちは「指先を伸ばす」「腕の高さを合わせる」「人に頼らず自分がしっかりと声を出す」等の基本的なことを自分たちで徹底して確認し、クラスとしてのまとまりが日に日に高まってきました。最終日には基礎基本をしっかりと身につけ、さらにクラスごとの工夫が施されたすばらしい集団行動や校歌・遠征歌が諫早青少年自然の家のプレイホールに響き渡りました。

すばらしいものを作り上げるには絶対に基礎・基本をおろそかにしてはいけないことを実感できたのではないのでしょうか。今後の君たちの人生を豊かにしていくためにも、生活や学習において基礎・基本を大切に「人間性」に磨きをかけていきましょう。五島高校1年生の今後の飛躍を願っています。

各学年より

「志とは」

第2学年主任 久保田 幸成

2学年175名の新学期がスタートした。世間一般に2年生は「中だるみの学年」と言われる。しかし、実際には学力をつけたり、人間的な成長をしたりするための準備期間として、とても大切な期間である。要はこの一年をどのように過ごすかが重要であるのだが、成長する者、しない者の差が出てしまう事が多い。いったい何が違うのか。その答えは「志」であると考え。その「志」を説明するため「レンガ職人」の話をした。

ある人が4人のレンガ職人（仮にA～Dとする）に「あなたはどのような仕事をしているのか？」と質問した。4人からは次のような返答があった。

- A「私の仕事はレンガを積むことだ」
- B「私の仕事はレンガを積み、塀を作る仕事だ」
- C「私の仕事はレンガを積み、塀を作り、教会を造ることだ」
- D「私の仕事はレンガを積み、塀を作り、教会を造り、人々に安心を与えることだ」

端から見ればレンガを積むという行為は同じはずだ。しかし心の中にある「志」に差があるので、かなり違った動きになる。AはDと比較して頑張っているように見えないであろう。

さて五島高校の生徒諸君に質問したい。君たちは何のために学ぶのか。君たちは何のために生きるのか。難しい問いだと思うが、この答えの作り方は大事だ。国語を学ぶのはテストで高い点数を取るためではない。我々が生きるのは自分の夢や希望を実現するためではない。もちろん瞬間的な快楽を享受するためでもない。学ぶことや生きることの先には何かあるのか……。そういう容易に答えが出せないことを考える力を、ここで身につけなければならない。「中だるみ」とは限定した、短い時間の中でしか物事を捉えられない幼い精神の産物である。高い「志」ある者は輝く。目の色が違う。毎日の一歩が違う。たるんでいる暇などない。私達教師も、世の中をよりよい方向に導く175名の若者を育てるのだという「志」を胸に、日々の指導に当たりたい。それが使命だ。

各学年より

「人生苦しいときが登り坂」

第3学年主任 宗田 将平

「峠の向こうに春がある」というのが、新3学年のスローガンに決まりました。先日、3学年集会で紹介したところです。このスローガンが決まった時、「峠」という言葉から登り坂をイメージしました。「峠」とは山の頂という意味です。山頂をゴールとすると、そこまでは、つまりずっと登り坂なのです。3年生にとって、この1年間はずっと険しく苦しい登り坂。茨の道なのです。

いよいよ本格的な受験勉強が始まりましたが、受験生とはわかりつつも行動の変化がない自分への苛立ち。頑張る友人たち見て感じる焦りと不安。課題の量は増える一方で、処理能力はさほど変わっていない現状。理想と現実のギャップに、自分に嫌気すらさしてしまう毎日。山頂をめざす3年生にとっては厳しい現実でしょうが、まずは現状を受け止める覚悟が必要です。そもそも峠まではきつい道のりなのですから、どの道を選んでもきついのです。

そういう3年生にこの言葉を贈ります。

「人生苦しい時が登り坂」

「登り坂」とは「上り調子」という意味です。つまり、苦しい時ほど成長するということです。3年生にとってこの1年間は大きく成長するチャンスです。

人生で一度しかない高校3年生のこの1年。少しくらい苦しくても、たった1年です（もう1年を切っていますが）。人生80年。そのうちのたった1年です。苦しむくらいの努力をしてほしいと思います。人生を振り返った時に、この1年がターニングポイントだったと誇れる努力をしてください。

我々教師陣は、君たちの努力を無駄にはしません。共に戦いましょう。苦しくても、いつもお互いに笑顔を忘れず、成長を感じられる1年間にしていきましょう。峠の向こうの「春」を人間的に成長した君たちと迎えられる日を楽しみにしています。